

## 石川県のニホンザル分布

水野昭憲 石川県白山自然保護センター

### A DISTRIBUTION OF THE JAPANESE MONKEY IN ISHIKAWA PREFECTURE

Akinori MIZUNO, *Hakusan Nature Conservation Center, Ishikawa*

ニホンザルは、冬の寒さの厳しい下北半島を北限とし、南は年中温暖な屋久島まで広く分布している。生息環境でも落葉広葉樹林と常緑広葉樹林の原生林から二次林、また海岸地帯から亜高山帯下部まで生息がみられる。広範囲にみる限り適応の幅の広い動物である一方、各々の地方では、限られた地域にのみ群れの分布が見られている。石川県においても、野生哺乳類の中では、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、さらに多くの中型獣と比較して、サルの群れは最も極限された分布を示している(石川県 1981)。

石川県では、白山山系の手取川上流及び犀川上流にのみサルの群れが確認されている。その範囲は、比較的人手の入っていない森林が広がっている当山系全体の中では、ごく一部の地域でしかない。本報は、石川県でのハナレザルも含めた過去と現在の分布状況と、人為圧を中心とした生息環境について言及した。

#### 現在の群れ分布

手取川流域のサルの群れは、その支流である尾添川と瀬波川流域に集中しており、同じ手取川の大きな支流である大日川と牛首川流域には見られない。石川県下で手取川以外には、金沢市の犀川上流にだけ群れが分布している。また周辺県の隣接地域では、白山山系の東斜面にあたる岐阜県荘川村内、庄川の支流、尾上郷川に群れが見られる(岐阜県 1978)だけである。

現在把握されているニホンザルのそれぞれの群れの名称・大きさ・遊動域等を列記する。

##### 1) カムリA・C群

山村住民にとって、時には山の愛嬌物であり、時には焼畑(この地方でナギハタと呼ぶ)作物の害獣として身近であった白山のサルが広く知られるようになったのは比較的新しく、吉野谷村中宮温泉で1963年に約60頭のサルの群れが撮影され新聞で紹介されたのが始まりであった。1964年から自然公園指導員であった糸田敏仁氏と地元吉野谷村がこの群れに餌付けを試み、1966年から中宮温泉近くのジライ谷の餌付け場で一般の人々の前へ姿を現わすようになった。群れの行動域の中にあつた山の名をとってカムリの群れと名づけられた。

この群れは中宮温泉の名物として観光に一役果す一方、白山学術調査団(1970年まで)や白山調査研究委員会などによって、生態や社会の研究対象となってきた。餌場は現在白山自然保護センターの自然観察園の一部として、吉野谷村と石川県が共同管理している。できるだけ野生に近い状態で観察できるように配慮から、来園者からの給餌はさせず、管理人から限定した餌を与えている。積雪期間は入山できないので給餌していない。

餌付けを開始した時に群れが分裂し、餌場へ来るようになった44頭をカムリA群、離れていった約20頭をカムリB群とした。B群はその後蛇谷上流側に観察されていたが、1970年頃から確認されなくなった。

カムリA群から1981年冬に分裂してできた群れをカムリC群としている。この冬は56豪雪ともいわれる大雪に見舞われた。積雪期にまとまった食物の得にくい白山の群れは、サブグループに分派行動しているのがしばしば観察される。大雪の中で分派行動していた順位の低いメスとその家系の一団がそのまま独立して新群を形成した(滝沢 1983)。以後A群がいない時にC群が餌場へ姿を見せるようになり、餌場への出現日数は、1982年にはA群27日、C群97日であり、1983年はA群105日、C群21日であった。1983年夏の群れの大きさは、A群105頭、C群35頭であった。

## 2) タイコA・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>群

尾添川の支流、中ノ川流域を中心に行動している群れで、新岩間温泉の谷向いのタイコ壁の地名をとっている。1970年頃に約70頭であったタイコの群れが1971年、1983年に分裂し、A群約70頭、B<sub>1</sub>群48頭、B<sub>2</sub>群34頭が数えられている(伊沢 1984)。冬期間A群は目附谷、B<sub>1</sub>B<sub>2</sub>両群はブナオ山から三ツ又にかけて行動域を持ち、春には中ノ川ぞいに上流へと移動する。夏には中宮登山道シナノ木小屋からゴマ平ヒュッテにかけて遊動しており、亜高山帯に入った標高2,000m近くでも観察(1971年8月室堂診療班情報)されたことがある。夏と冬の行動域は約10km離れており、白山で季節移動が確認されているものの中で最も遠距離を移動している群れである。冬はカムリA群と隣接して生息しており、野生状態での群れの動き、群間関係などの研究対象となっている(伊沢 1982)。

## 3) 国見群

尾添川の最上流部に生息している群れで、石川と岐阜の県境にある国見山(1,690m)の南斜面を主な行動域としていた。両県を結ぶ白山スーパー林道がこの行動域の中央を縦断して1977年に開通してからは、南側にあたるフクベ谷から妙法山にかけて主な行動域を移動したことが知られている(石川県 1982)。筆者らが蛇谷本流で4月に糞を観察していることから、冬期間は蛇谷本流ぞいへ下りてきていると見られる。1970年頃には小さな群れとされていた(河合ほか1970)。野生ザルの観察が容易になる積雪期には接近できない地域であるため、十分な記録は得られないが、1982年6月と8月の白山スーパー林道での観察など断片的な情報からみると40~50頭の群れである。

## 4) 雄谷群

蛇谷と並ぶ尾添川の支流の一つである雄谷流域は、手取川水系の中でも最も人手の入っていない地域である。林道もなく、入口の一部を除いて森林伐採はされていない。しかし長い間、この流域でのサルの情報は少なく、地元ではサルのいない地域とされていた。1960年頃の残雪期に瀬波川から雄谷へ尾根越えしたのが見られ(中宮、佐々木武夫 談)、1966年頃、クマ猟師により雄谷の清水又で群れが見られている(中宮、辻本勝 談)。1976年から筆者らによる観察例が増えてきており、1983年に64頭(伊沢 1984)が数えられている。冬から早春の行動域は判明しているが、夏の行動域は把握できていない。

## 5) 瀬波川流域の群れ

手取川の一支流である瀬波川の奥地を良く知っている土地の人の間では、昔は瀬波にサルが3群といわれたものだが近年は少ないとされている(瀬波、橋本政一 談)。残雪期に奥地へ入るクマ猟師等からの話を総合すると、近年はこの流域に2群が生息すると見るのが適当である。

下流に行動域を持つ群れは、約50年前まで村落周辺の畑へ出沒して困ったというが、鉄砲でサルを射つようになってから近くへ来なくなっていた。1980年12月に村落近くの柿の採り残しを採食に来

て以来、毎年冬には村落近くへ姿を見せるようになってきている。1983年には29頭を数えた。

瀬波川の奥地に分布すると思われる群は、近年目撃が少なく、調査目的での観察記録は全くない。ここでは、河合ら(1970)のまとめを引用し、下流のものを黒谷群、上流側のものをガラ谷群とする。

#### 6) 高三郎群

石川県内で手取川流域以外で唯一ニホンザルの群れが確認されているのが犀川上流、高三郎山である。この一帯に群れがあるという民間情報は1971年頃からあった。1981年5月に白山自然保護センターによって、仔ザルを含めた9頭が目撃され、高三郎群と名づけられた。大きな群れを見たという人もあり、個体数は30から50頭と推定される。犀川支流、二又川流域の成が峰から高三郎山にかけて行動域をもっていると考えられる。

以上の群れの名称及び個体数は表1のとおりとなり、ハナレザルも考慮に入れると、石川県内のサル総個体数は10群450頭から550頭の範囲といえる。群れの遊動域をとりまとめると図1のとおりである。他に、石川県内にはサルの群れは見られない。白山山系は多雪のため冬期間には群れが発見されやすいこと、通常人のあまり入らない地域であっても、ほとんどの場所が残雪期に登山者やクマ猟師によって観察されているので見落しはないと判断できる。

表1 石川県内のニホンザルの群れ

流 域	名 称	個 体 数
尾 添 川	カ ム リ A	105
	C	35
	タ イ コ A	約 70
	B <sub>1</sub>	48
	B <sub>2</sub>	34
	国 見 谷	40~50
瀬 波 川	黒 谷	30~40
	ガ ラ 谷	不 明
犀 川	高 三 郎	30~50
	計 10群	426~496+α

#### ハナレザルの分布

サルの群れが白山山系北部の奥地の限られた地域に分布しているのに対し、ハナレザルの出没は、加賀地方と呼ぶ石川県南部の山地ほとんど全域に広がっている。

小松市にあった粟津温泉野猿公園では、東京都高尾山で飼育されていた小豆島産のニホンザルを1965年に25頭引き取り、囲い込みで飼育していた。一時は温泉客を楽しませたこともあったが、近年は人気が無くなり1983年6月に閉鎖され、55頭全部が他の動物園に引き取られていった。この野猿公園で発情期になると野生のオスザルが近寄ってきて柵の外から騒ぎ立てたり、柵内へ飛び込んで群れ

を混乱させ、捕えられて個別檻に収容されるものがあった。粟津ではこれらを「白山猿」と呼んでおり、計6頭となった。白山山系の野生群出身のオスザルとみられ、群れの分布地から25km以上離れていることになる。

石川県内では農業等への被害で重大な問題となることは少ないが、時どきハナレザルが話題となっている。1983年6月に鳥越村出合で1頭のサルが出没しイチゴ畑を荒らした。また1983年3月には鶴来町本町の人家へ1頭のオスがとび込んできて捕りもの騒ぎがあった。

白峰村白峰へ1981年秋に出てきた1頭のオスは、村落近くの山林内で林業者や土木作業員にとびついて咬んだり引っ掻いたりした。被害者は約20人となり、うち2名は入院して手当てを受けた。村内では対策会議も持たれ、駆除のため猟友会が出動し一度発砲したが捕殺にいたらず、それ以降姿を見せなくなった。

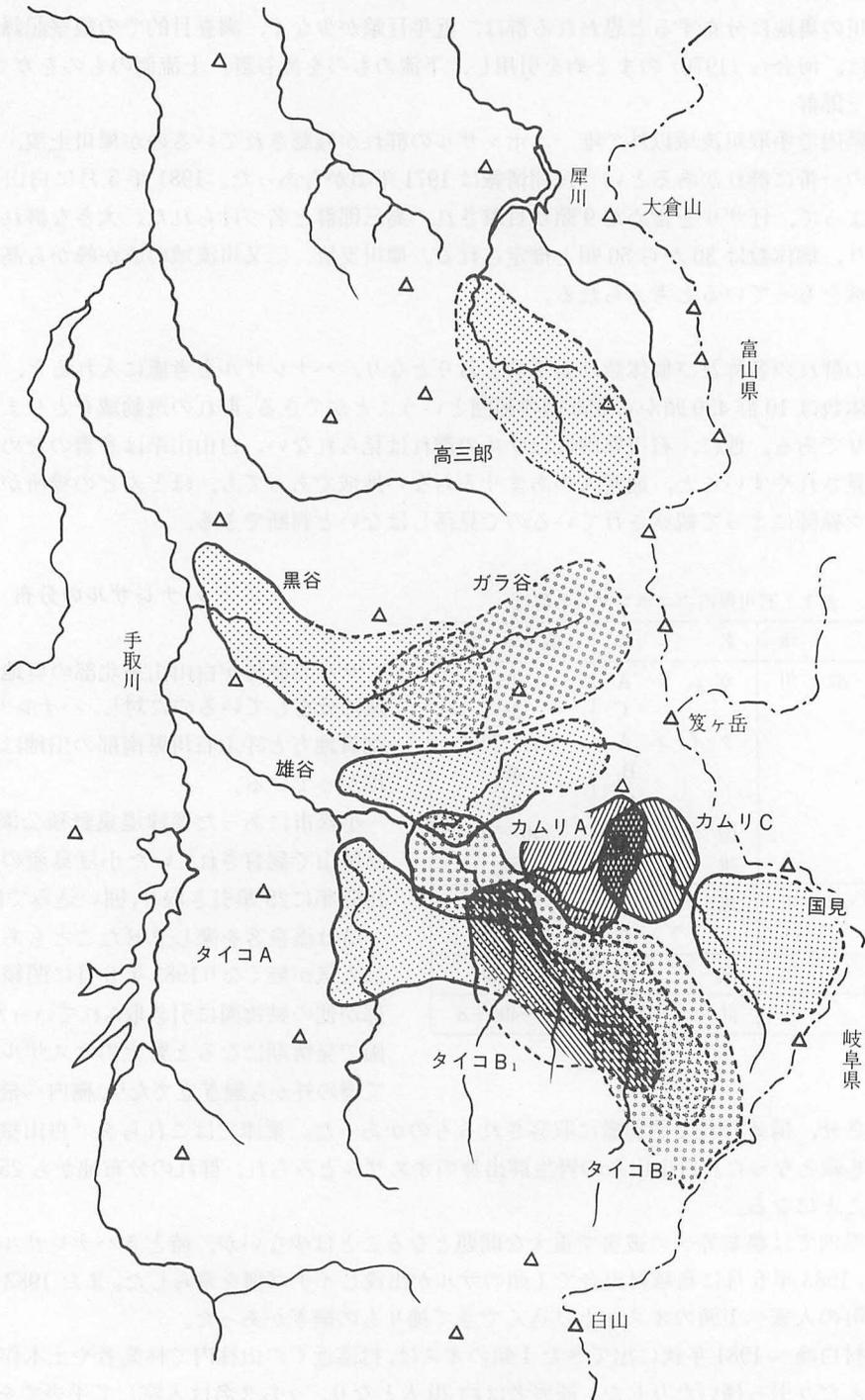


図1 石川県のニホンザルの群れ分布地 (破線は推定遊動域, ■はカムリA・C群餌付場)

これら全くの単独サルのほかに、群れ分布地から完全に離れた地域で、オスグループや仔づれの小グループが見られている。白峰村内、牛首川と宮谷川の合流点で 1975 年 8 月に 3 頭のサルが地元民によって目撃されており、うち 1 頭は仔ザルであったという。小松市新保の大日川源流で 1975 年春に、大小合せて 5 頭づれのグループをイワナ釣りの人が 2 度目撃している。医王山北部の金沢市奥新保では、1982 年 12 月に仔ザルを含む 3 頭、1983 年 4 月に 5 頭の小グループが観察されている。

これらの小グループの形成過程と行動域については十分な説明は与えられていない、しかし、新しい地域に新群を形成することに結びつく可能性もあり注目に値する。

加賀地方の群れ分布地以外にハナレザル又は小グループが出没した 1970 年以降の記録をまとめると図 2 のとおりである。

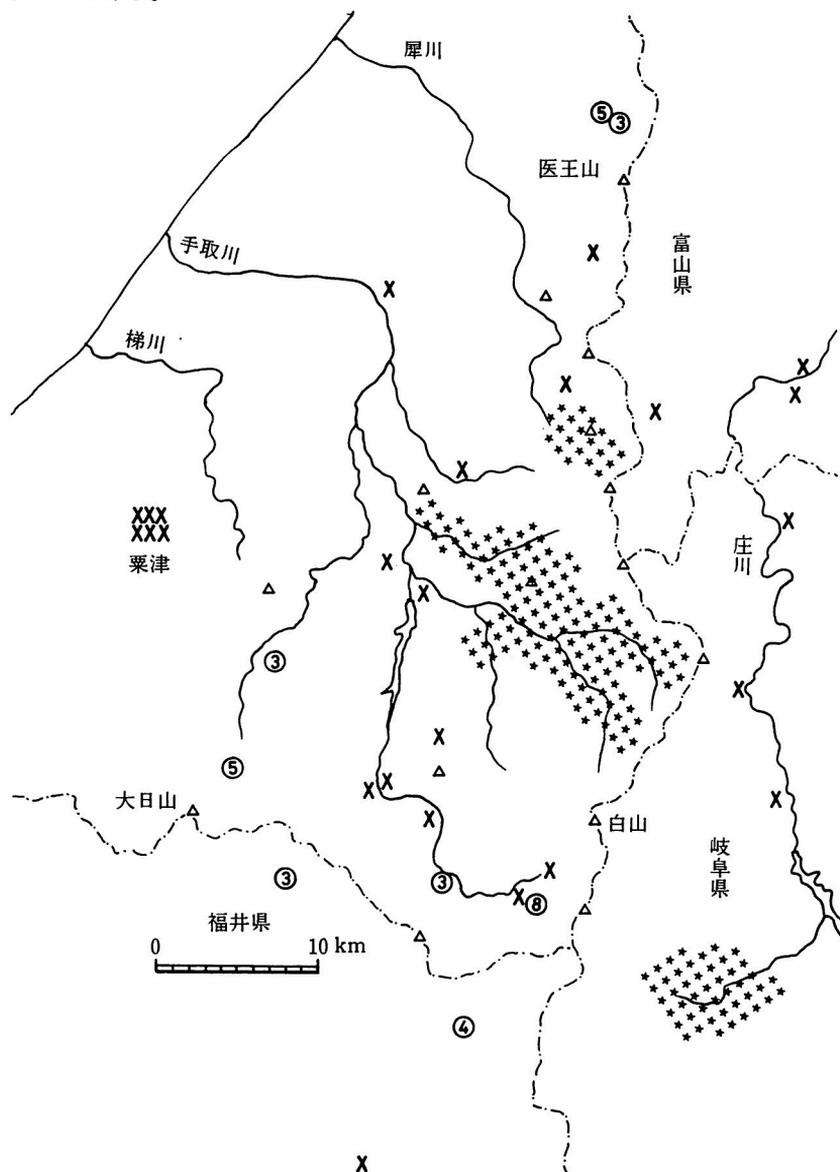


図 2 加賀地方における群れ分布地以外でのハナレザル及び小グループの確認地点 (★印は群れ分布地, ×は 1 頭, ③は 3 頭づれ小グループの目撃地点)

過去の分布

はるか昔のサルが存在をうかがい知るのに、猿のついでいる地名を参考にした。サルは比喻や信仰の材料ともなり、地名がそのまま野生のサルの存在と結びつかない場合もあり得る。山や谷の名でサルの分布と関連すると考えられるものを拾ってみた(図3)。

1) 能登地方

能登半島には猿山、猿谷、猿島といった地名が残っている。明確な記録の残されているものとしては、浅加久敬(1709)が「能登浦傳(下)」の中に、現在の門前町猿山の近くで、「山ふかく猶今まようおちこちに、あらわれましらの聲ぞきこゆる」と詠んでいる。また奥能登に1889年(明治22年)の

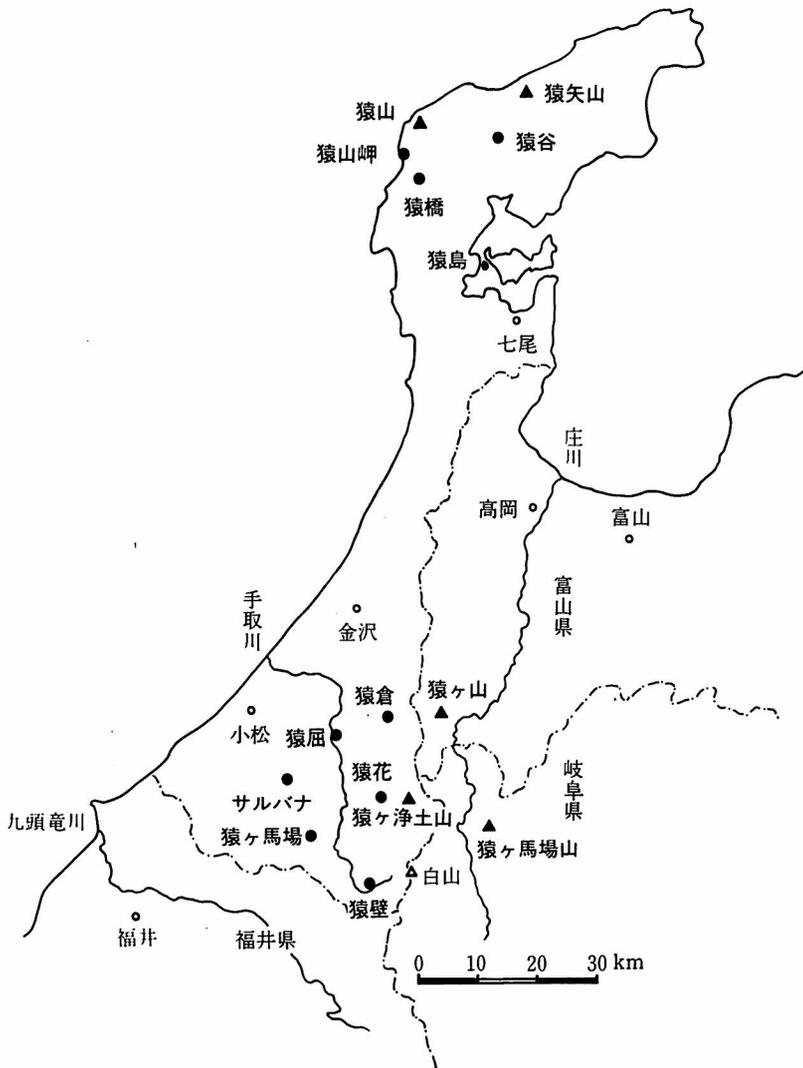


図3 石川県内のサルのつく地名

合併まで猿橋村があり、「昔、流罪人が橋をかけたら猿が渡り初めをしたのでこの名がついた」とされている（「鳳至・珠洲郡村名由来帳」1701）。

第2回自然環境保全基礎調査のアンケート（石川県 1978）では、奥能登といわれる珠洲市、輪島市・門前町・穴水町・中島町から、以前ニホンザルが生息していたが絶滅したという情報が得られている。能登半島からサルが消滅した時期については、正確な最後の記録はみあたらないが、1965年の時点で鳳至郡・鹿島郡の古老で若い頃にサルを見たという人が残っているので、最後のサルは明治末期であったろうとしている（石川県 1965）。

## 2) 金沢地方

明治年間には犀川上流一帯には広くサルが分布していたと考えられる。現在は廃村となっている倉谷村では、ソバやアズキ畑へサルが出て、大正の終り頃まで毎年サル騒ぎがあり、村人が強制的にサル退治に参加させられたという（北国新聞社 1973）。これより北の浅ノ川上流にある河内谷でも、明治年間には木炭の搬出の時によくサルにおどかされたと言われている。

## 3) 手取川中流域

現在の鳥越村杖地区には大正年間までサルの集団がいて、六尺の槍でサル捕りをしたという。鷲走ヶ岳に30頭ほどの群れがあって、アシガ谷の学校近くの畑へ来て大根やカボチャを荒らされたので巻き狩りをしてきた。大正年間に一度に9頭捕ったのが最後であった（左礫、中田市太郎 談）。

河内村でも焼畑の被害が大きく、明治初期には100頭ものサルが横一列に下りてきて畑を全滅させたと言われている。内尾地区では明治38年に8頭獲ったのが最後になり、奥池地区では大正10年頃までサルの群れがゼンマイ採りの人をおどしたという（板尾、上山秀之 談）。

## 4) 南加賀地方

加賀藩の家老であった横山政和の紀行文「小松近郷巡見道之記」（1863）には尾小屋村の項に「……峠の右、谷ノ向ナル高く近キ山ヲ大倉ヶ岳ト云、其谷ヲ岩底ト云猿多シ……」とある。また近年は夏だけしか人が住まなくなった新丸地区では、明治年間まではサルの群れがあったと伝えられている。

白山山系について、サルの群れの存在が伝えられた地区および消滅したと推定できる年代を図4に示した。なお奥能登地方のサルの消滅については明治時代であるという以上に詳細な情報が得られていないので割愛した。

## 考 察

### 1) 人為圧

畑作物を荒らすために、サルは昔から山の害獣とされてきた。米はほとんど獲れなかった山村では、焼畑のヒエ・アワ・ソバ・大豆は命の綱であり、それらを荒らすサルは子供の頃から悪物の代表と教え込まれてきた（内尾、内藤長松 談）。畑荒らしの対策として、火を起し煙を出したり、赤布の旗を立てたりしたところが多い。出作り生活から盆や祭りに本村へ帰る時にも、サル番のために出作り小屋に残ったこともある（中宮、畑与吉 談）。

畑の害獣として駆除されたと同時に、サルの頭の黒焼きは、高価な薬として売買されたために、少いながら現金収入源としても狩猟されていた。吉野谷村では1940年代までサルの頭の黒焼が作られていた。また、肉は食用に、胆のうや腸は乾燥して村内で薬用に供せられた。

サルを獲るには冬から残雪期にかけて巻き狩りをするが多かった。追いつめられるとサルは木に登るので石や棒を投げて木から下ろし、穴などにうずくまったところを槍で突いた、というのがこの地方で一般的であった。

適応能力の幅広いニホンザルの群れが、昔は広く分布していたが、現在の限られた地域に分布す

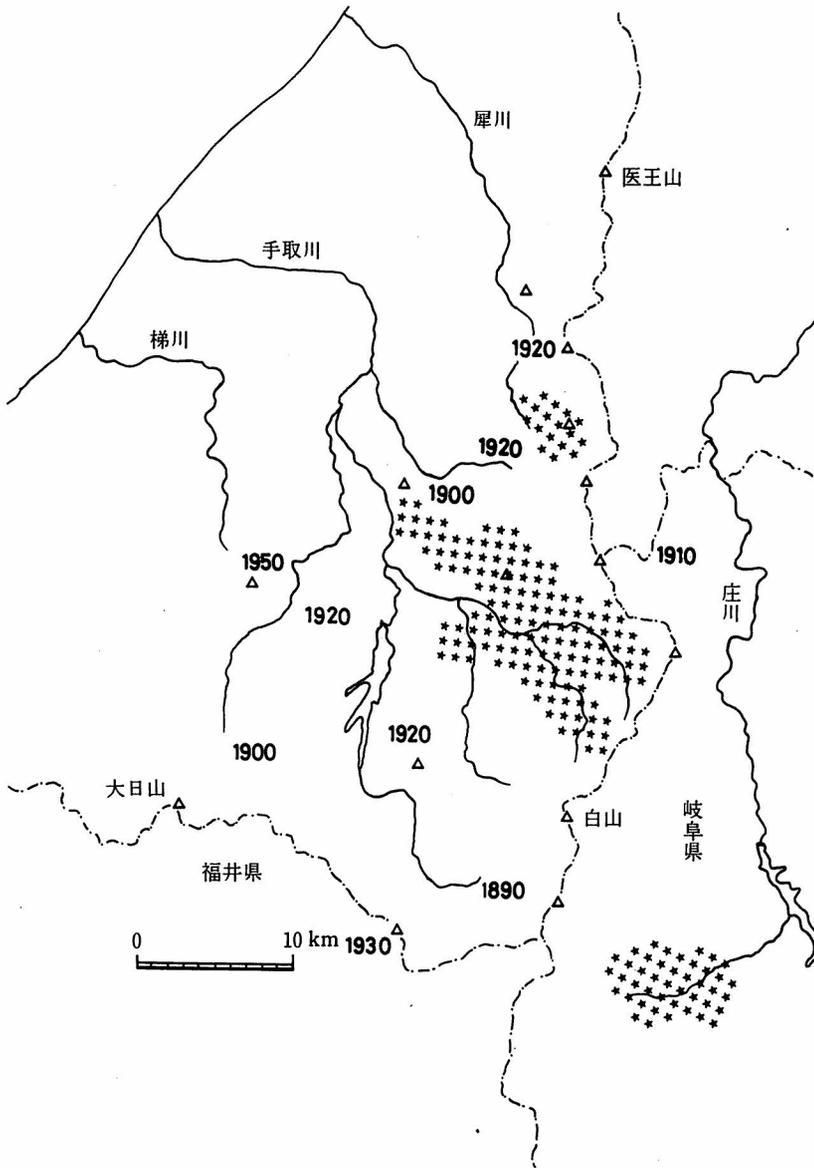


図4 白山山系のニホンザルの群れが消滅した年代 (★は現在の群れ分布地)

るようになったのは、人間による害獣駆除や薬用のための狩猟によるものであると言える。サルの保護がわが国の法令上明文化されたのは、1947年の狩猟法施行規則改正に際して、カモシカ、カワウソ、メスジカと共に狩猟獣類から除かれたのが最初である。全国的に同様の傾向があったと推察されるが石川県でも1930年頃までにほとんどの地域でサルの群れを絶滅させていた。

白山ろくで特色のある出作りと焼畑は1960年頃からほとんど行なわれなくなり、炭焼きも衰退の一途をたどった。以来、山の畑を荒らされることも少なくなり、群れの存在を脅かすような害獣問題は発生しなかった。サルの調査が本格的になされるようになった1970年以降をみると、ゆるやかであるが、白山山系のサルの群れ数、総個体数、分布域とも増加傾向にあると見る人が多い。

水野：石川県のニホンザル分布

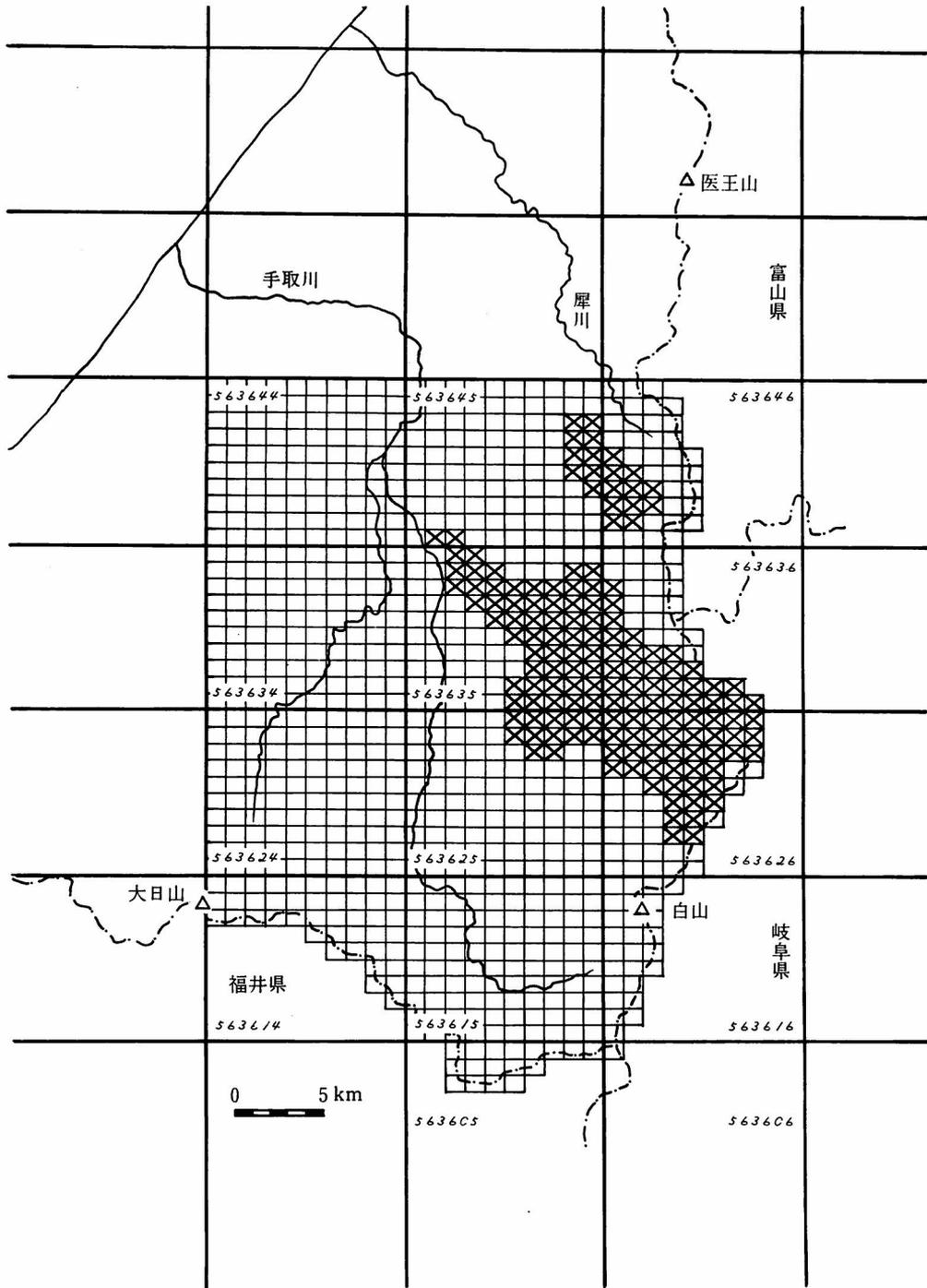


図5 石川県のニホンザル群れ分布地及び周辺地域メッシュ図  
 (☒は群れ分布地, 数字は国土数値情報メッシュ番号)

1983年秋はブナの凶作年であり、例年は積雪を見てから村落周辺のカキなどを採食に来ていた群れが、10月から出没した。尾口村尾添では旧出作り地のクリ林が被害を受け、吉野谷村瀬波では収穫直前のダイコン畑が荒らされた。後者では害獣駆除が認められたものの実際には捕殺に至っていない。今後、分布域の拡がり、サルが人を恐れなくなっていることで、畑等への被害が増加する危険があり、注意を要する。対策としては、人家や畑周辺へ出没するサルに対し、住民がかわいがらずに、常に追いはらう習慣を持つことが必要である。

2) 分布域の環境

白山山系の石川県側のサルの群れが分布している手取川と犀川上流に共通しているのは、周辺の地域に比較して谷沿いが急傾斜地となっていることである。サルの食性の幅から考えると、北陸地方では亜高山帯から上を除いて森林のあるところにはどこにでも分布する能力があると考えてよい。実際に昔は広く分布していたことがわかり、人間の狩猟圧で追いつめられ、最後に残ったのは、人間が容易に近づけない多雪の急傾斜地であった。

群れ分布地を国土数値情報（国土地理院、ファイルKS-114）の第3次メッシュ（図5）の平均標高別頻度でみると図6のようになる。標高200mから2,000mの地域を利用しており1,000mから1,200mのメッシュが37個と最も多い。周辺地域との比較のため、図5にメッシュで示した地域の頻度を併記した。周辺地域には平野部や都市部は含まれていない。傾斜をあらわすものとして起伏量（1メッシュ内の最高地点と最低地点の差）の分布を見ると図7のようになり、山系の中で急傾斜地を中心に分布していることがわかる。

急斜面は雪崩多発地であり、冬でも積雪の割れ目や雪崩跡から地表の植物の芽や根を採食することが可能である。また雪崩跡の草原では早春にフキ、ハクサンアザミ、シシウド、ヤマヨモギなどの草本が芽を萌き、長い冬を耐えたサルに豊かな食物供給を約束している。高基草原の面積の広いところにはサルの群れが集中していることは菅沼・芳賀（1974）も指摘している。

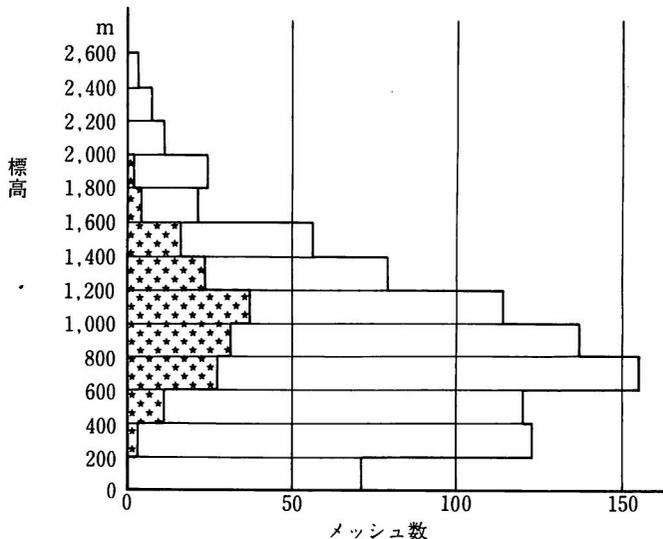


図6 白山山系のニホンザル群れ分布地の標高階級別頻度  
 (国土数値情報3次メッシュを使用,  
 ★は群れ分布地155メッシュ, 白地は周辺区域766メッシュ)

水野：石川県のニホンザル分布

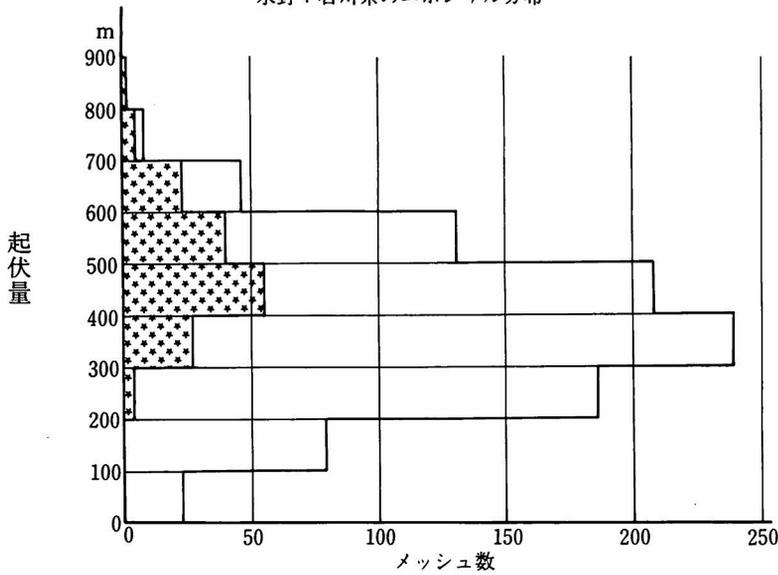


図7 白山山系のニホンザル群れ分布地の起伏量階級別頻度  
 (国土数値情報3次メッシュを使用、★は群れ分布地155メッシュ、白地は周辺地域766メッシュ)

多雪に加え急峻な地形で狩猟など人間の圧力から逃がれ得たことと、冬から春にかけての採食地があることは、ニホンカモシカにとっても同様の環境条件であった。1950年頃にはカモシカも極めて数が減少しており、奥山に追いつめられていた。1955年に特別天然記念物に指定されて以降、カモシカの分布域と生息数は増加している(水野ほか1982)。石川県下で1950年頃にカモシカが残っていた地域であり、現在も高密度に分布している地域は、現在のサルの群れ分布地と良く似ている。カモシカに比較して現在のサルの群れ分布地がせまいのは、サルの方が繁殖力が低いと、群れ生活をするサルが行動域をかえたり、分散する速度が遅いことが考えられる。

### 摘 要

- 1) 石川県のニホンザルの群れ分布、ハナレザルの出没地、群れの絶滅地をとりまとめ、現在の分布地の特性と限られた分布を示す要因を明らかにした。
- 2) 現在石川県内には、手取川の支流である尾添川・瀬波川及び犀川上流に10群のニホンザルが分布している。総個体数は450から550頭の範囲と推定される。
- 3) ハナレザルの出没は加賀地方の山地に広くみられ、3から8頭の小グループも目撃されている。
- 4) 能登半島では明治年間に、加賀地方では1890年代から1930年代までにほとんどの地域で群れが消滅している。
- 5) 近代になって群れの分布域をせばめたのは害獣駆除と薬用のための狩猟であった。群れが残ったのは多雪・急傾斜地で人の近づけない地域が中心となっている。

### 文 献

岐阜県 (1978) 動物分布調査報告書(哺乳類), 環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査。  
 北国新聞社 (1973) のと・かが四季の野生。  
 石川県 (1965) 能登半島学術調査書。

石川県 (1978) 動物分布調査報告書 (哺乳類), 環境庁委託第2回自然環境保全基礎調査.

石川県 (1981) 石川の動植物.

石川県 (1982) 尾添川流域自然環境保全対策調査報告書.

伊沢絃生 (1982) ニホンザルの生態——豪雪の白山に野生を問う, どうぶつ社.

伊沢絃生 (1984) 白山地域における野生ニホンザルの群れの分裂とその生態学的意味, 石川県白山自然保護センター研究報告第10集, 99—109.

河合雅雄ほか (1970) 白山周辺におけるニホンザルの生態学的調査 I, 石川県発行「白山の自然」335—343.

水野昭憲・上馬康生・茨木友男 (1982) 石川県におけるニホンカモシカの分布域および生息頭数の推定, 石川県白山自然保護センター研究報告 第8集, 59—72.

菅沼孝之・芳賀真理子 (1974) 白山蛇谷における高茎草原植物社会とニホンザルの群れの分布との関係, 石川県白山自然保護センター研究報告 第1集, 65—70.

滝沢均 (1983) 白山のニホンザル群, カムリA・C両群の家系図, 個体数, 出産数, 生存率に関して, 石川県白山自然保護センター研究報告 第9集, 67—76.

### Summary

- 1 A distribution of the Japanese monkey in Ishikawa Prefecture was discussed from the point of habitat and a historical change.
- 2 At present, ten troops of the monkeys inhabit in the upper stream of the Tedorigawa River and the Saigawa River. Total population was estimated at 450 to 550 in the whole area.
- 3 The monkeys which do not belong to any troop were seen widely in the forest area of the southern part of the Prefecture.
- 4 In about 1900, monkey troops were extinct from Noto Peninsula and in the 1930s, from wide area of the lower mountain zone of Mt. Hakusan.
- 5 Troops of the monkeys have still remained only in snowy and steep areas where man could not enter easily.